



タイトル つくられる偽りの記憶
あなたの思い出は本物か？

著 者 越知 啓太 (おち けいた)

出 版 社 DOJIN 選書 (化学同人)

発 売 日 2014年11月30日

ページ数 207 ページ

「自分が持っている思い出は間違いのないもの」と考えるのが普通だが、近年の「認知心理学」の研究では、「それほど確実なものではない」ということが明らかになってきている。私たちが思い出しているものは、現実の記憶ではなかったり、もっとも極端な場合には、実際には起らなかった記憶もあるという。

ぐっと引きつけられたところで目次を見てみよう。

はじめに

第1章 その目撃証言は本物か？

- 1 目撃証言が冤罪をつくり出す？
- 2 あとから入ってきた情報が記憶を書き換えていく
- 3 質問するだけで記憶が書き換わっていく

第2章 体験しなかった出来事を思い出させることができるのか？

- 1 体験しなかった出来事の記憶
- 2 イメージするとフォールスメモリーが形成される

第3章 生まれた瞬間の記憶は本物か？

- 1 生まれた瞬間の記憶？—— クリスチナの出生時記憶
- 2 人間は記憶をどこまで ^{さかのぼ} 遡れるか
- 3 出生の瞬間の知覚能力
- 4 催眠で過去の記憶を思い出させることはできるのか
- 5 出生時の記憶を思い出させるとなにが起こるのか？

第4章 前世の記憶は本物か？

- 1 前世の記憶を思い出した人々
- 2 前世の記憶を思い出させる
- 3 前世の記憶を思い出すのはどのような人々か

第5章 エイリアンに誘拐された記憶は本物か？

- 1 エイリアンに誘拐された人々
- 2 エイリアン・アブダクション現象を解明する
- 3 エイリアン・アブダクションにあいやすい人の特性

第6章 本当に昔はよかったのか？

- 1 現在の自分が過去の自分の記憶を決める
- 2 人生が終わりに近づくと過去が輝いて見えはじめる

おわりに

第1章では、事件の目撃者の記憶が、実は驚くほど脆弱ぜいじやくなもので、外部からの情報によって歪んでしまい、それによって冤罪えんざいが作りだされてしまうこともあるということを明らかにする。

イノセンスプロジェクトというプログラムで無実を訴えている囚人の中で事件の血液サンプルなどが残っていてDNA鑑定ができるケースを調べると1992年から2011年までの19年間に292人が無実であったことが明らかになった。しかもその中の17人は死刑囚(無実の人の6%)だったという。

無罪が明らかになったケースを分析していくと「誤った目撃証言」が77.69%と一番多かった。つまり、私たちが信頼を置いている目撃者の証言というものの自体が、実はそれほど信頼できるものではない、ということが明らかになったわけである。

なぜ、目撃証言は誤りやすいのか、原因は私たちの記憶にあるという。私たちの記憶は固定化されたものではなくもっと「やわらかいもの」だという。

私たちの記憶は、事件後に仕入れた記憶で変わってしまったり、事件以外に見た顔を事件のときに見た顔だと思い違いしてしまったり、頭の中で想像することで変容してしまったりするという。

コラムのSF・サスペンス映画の解説とガイドは楽しく読める。コラム1の「暗殺者 (The Bourne Identity)」は、ロバート・ラドラムによるスパイ・サスペンス小説だが、マット・デイモン主演の映画作品の方が有名だ。

この映画は、記憶喪失が重要なテーマになっている。主人公ジェイソン・ボーンはある日、海を漂流しているところを漁船に助けられる。一命は取りとめたものの、自分が記憶

の一切を失っていることに気付く。自分が何者かを探ろうとするが、その過程で、特殊な能力があることに気付く。寝場所がなく、公園のベンチで寝ていた時に警官から尋問を受け、捕まりそうになるが、彼は一瞬で二人の警官をノックアウトしてしまう。気付くと目の前に二人の警官が気絶しており、自分の手には警官から奪った拳銃があった。また、英語、フランス語、ドイツ語も自由自在にしゃべることが出来る。さらに、レストランに入った時には、駐車場に止まっていた 6 台の車のナンバーを記憶している自分に気づく。主人公ボーンが、最後の最後まで銃に頼らない描写も巧みだ。自分は恐ろしいことをしていたらしいと感じたボーンの心には、自分の正体を知りたいが、生まれ変わりたいという願いも生じる。その思いが、過去の象徴である銃を手にしないう描写で伝わってくる。

また、ボーンと行動をとる中で自身も変わろうと思いはじめるマリーの変化も魅力的だ。スリリングなアクションもふんだんにありながら、繊細な心理描写と叙情的な映像で小説のような味わいを醸し出している。

「The Bourne Identity」は、YouTube などの映画の項を覗くと運が良ければ、無料で鑑賞することが出来る（YouTube などでは時々「この動画はユーザーにとって削除されました」などとあり、がっかりすることもある）。

第 2 章では、実際には生じなかった出来事の記憶を、実験で容易に作りだすことが出来ることを示している。また、このような記憶がどのようなメカニズムで作られ出されるのかも説明する。

コラム 2 では、SF 作家のフィリップ・K・ディックの「追憶売ります」が登場する。この小説を映画化したものが、アーノルド・シュワルツェネッガー主演の「トータル・リコール (TOTAL RECALL)」である。

この映画では、レジャーとしての記憶の埋め込みが描かれている。主人公のダグラス・ウェイドは昔からなぜか火星に魅せられ、いつか火星に行ってみたく思っていた。しかし彼は一介の下級労働者であり、火星に行けるだけの資金は勿論持ち合わせていない。そこで彼が試みようとしたのは、火星に行ったという記憶を心の中に人工的に埋め込むという方法だった。……。

物語の後半で、装置にかけられた後のことは、彼が実際に体験していることではなく、実は、すべて植え付けられた記憶である可能性があるということである。これが思い出した本当の記憶であるのか、それとも植え付けられた冒険譚なのかは彼には判らない。

もし、将来テクノロジーとして記憶の埋め込みが可能になった場合、おそらく大きな問題として生じてくるのは、……と続く。

第 3 章から第 5 章では、驚きの記憶体験 —— 出生時の記憶や前世の記憶、エイリアンに誘拐された記憶など —— について、それがどのようなものなのか、そしてこれらの記憶がどのように作りだされてしまうのかを明らかにしていく。

そして、最後の第 6 章では、私たちが過去の記憶を変形したり、存在しない記憶を作りだしたりすることが、実は私たちの正常な心理的メカニズムである可能性について議論を進めている。

また、本書では 5 つのコラムを設けて、私たちの記憶の謎について扱っている映画を、いくつか紹介している。様々な SF 映画やサスペンス映画では、私たちの記憶の謎が取り上げられており、その中には、心理学的に見ても非常に興味深い作品も少なくない。ここでは、評者もかつて鑑賞した「The Bourne Identity」と「Total Recall」のさわりの部分を挙げておいた。

私たちの記憶は、保管庫のようなもので、過去の色々な体験が集積されているアルバムのようなものというイメージを持っているが、実はそのようなものではなく、保管状態はパーフェクトではないと、著者は様々なテーマによって明らかにしている。

記憶はしばしば欠落・変質するし、あとから刷り込まれることもある。目撃者の証言は容易に変容してしまうし、実際には体験しなかった記憶も思い出させることが可能だった。ときに、私たちは、実際には記憶しているはずのない出生の瞬間の記憶や前世の記憶、エイリアンに誘拐された記憶まで思い出してしまうことも分った。

これらの現象は病理的な現象のように思われるが、もっと広い観点から見ると、このような記憶の改変は、実は「私たちの記憶システムが持っている正常なメカニズムの一つではないか」と考えることが出来ると著者はいう。

一見異常な想起でも、想起によって自らの精神的な不調の原因を納得させようとする動機が含まれていたし、今の自分が昔の自分よりも優れていると思うために過去の自分の記憶を悪い方向へ改変したり、また、高齢者になると自分の人生をよきものとして受け入れるために、逆に過去の記憶を美化して書き換える傾向は、もっと頻繁に起こっていることが分った。記憶を書き換えるということは、むしろ記憶の正常な機能の一つかも知れないと著者は言う。

「認知心理学」の分野では、こうした記憶の仕組みを解明する実験や研究がたくさん行われ、確かな、それでいて私たちの日常的な思い込みを^{ひるがえ}翻すような知見が得られている。しかし、その詳細は素人には難しく、敷居が高いのが普通である。

本書は「認知心理学」の入門書である。「その目撃証言は本物か?」、「体験しなかった出来事を思い出させることはできるのか?」など、短編ミステリーのような謎解きの全 6 章を読み通すことによって、記憶のメカニズムについて、現時点でほぼ最新の正しい知識を身につけることができる。

2015. 3. 11